

“卵子は彼女のもの、でも子供に流れる血は私のもの”：インド人代理母と親族の日常的形態

アムリタ・パンデ

(Amrita Pande. *It may be her eggs, but it's my blood: surrogates and everyday forms of kinship in India*. *Qual Sociol* 2009, 32: 379-397.)

私を雇ったカリフォルニアに住む Anne は、女の子を欲しがっていたけれど、エコー検査の前から、私から生まれるのは男の子よって言ってあったの。私の子が 2 人とも男の子だから、この子もそうだと思う。私は正しかったのよ、男の子だったの！彼女は卵子をあげただけで、血と汗と労力を払うのは私だもの。もちろんこの子は私を母親だと思うでしょうね。(Raveena、グジャラート州の代理母、文中強調点は筆者による)

インドの商業的代理出産を論ずる本研究では、「親族の日常的形態(everyday forms of kinship)」——通常の意識的戦略の産物としての親族組織、また時には生存や抵抗の手段としての親族組織——という概念を取り入れている。親族の日常的形態に焦点を当てることで、代理母が、出産に関わる他の関係者たちと共に築く、創造的かつ柔軟な親族組織の存在を明らかにする。しかし私が強調したいのは、代理母が築く親族の日常的形態は、生物学や生殖学のみ親子関係を帰する理論といかにかき離れているかということである。また、インドの親族組織研究でよくいわれる父系重視の仮説もあてはまらなかった。そうではなく、親族組織の基盤は、妊娠出産という労働に置かれるのと同時に、体内物質（血液、母乳）の共有、妊娠中の関わりに置かれている。体内物質を共有した関係を重視し、遺伝上の母親や代理出産に関わる男たち（遺伝上の父親と代理母の夫）と子供の間を以下に見ることで、代理母は遺伝的つながりを頂点に置く既存の親子関係ヒエラルキーに異議を唱える。同時に、赤ん坊、依頼母、寮生活を共にする代理母らと血縁関係にも似た親密さを形成する中で、インド人代理母は、階級、カースト、宗教、時には人種や国籍さえも超えた結びつきを作り上げるのである。親族組織を決定する上で現在支配的な考え方を、以下の点から反論する。すなわち(1)血縁の再定義、(2)父系主義の再解釈、(3)境界を超えた労働による結びつき、の3点である。

血（物質の共有）と汗（労働）を親族意識の根拠とする考え方に注目したことにより、本研究は、生殖によらない親族組織の存在を指摘した人類学的研究であると同時に、親族的つながりを変性し、家族と親族組織を形成・維持する労働を可視化したフェミニスト研究であるともいえる。

代理出産と親子関係

古典研究を読むと、親子関係というのは血のつながりで決まるとされることが多い。(Schneider 1984; Finch 1989; Strathern 1992)。学者たちは血縁関係と「擬似血縁」関係の共存（例えば養子縁組や同居などを通じて形成された親子関係）を認めてはいたが、一方で、生殖を基盤とする関係に対し、そうした「擬似血縁」関係をどう位置づけるか、という議論も頻繁になされてきた。人の生殖は万代不変な特別のもので、他の方法で獲得された人間関係とは一線を画すというのが、古典研究の考え方であった。

この「古典的」な見方が支配していた親子関係研究に対し、その根拠の薄さを最初に指摘したのはおそらくデビッド・シュナイダー(1984)であろう。彼は、従来の親子関係論が欧米の血縁主義に基づくもので、必ずしも異文化間に共通の考え方ではないことを示した。シュナイダーの研究が従来の親子関係論の普遍性に異議を唱える一方、新しい生殖技術——体外受精、配偶子提供、代理出産など——もまた、それまで「自然」とされてきた生物学的親子関係の概念に対抗するものとして現れてきた (Franklin and Ragone 1998; Strathern 1992; Carsten 2000)。例えば体外受精型代理出産では、遺伝子と出産という2つの競合要素に母性が分割される。別の人間の受精卵を代理母に移植する体外受精型代理出産では、3人の母親——生物学的な母親（卵子を提供した女性）、代理母（出産した女性）、社会的な母親や依頼母（子供を育てる女性）——が出てくる可能性があった。こうなると、母親を断定することは難しい。配偶子の提供、分娩行為、生後の世話——これらの要素が切り離されており、どれも母子関係を決定づける根拠とはならなかった (Strathern 1992; Ragone 1994, 2000)。

しかし、代理出産に関する既存の論文は、どの関係を、どういった状況で「本物」とみなすかを決定するための法律に意識を傾けるものが多い。依頼母、代理母、卵子ドナー、遺伝上の父親など、誰を子供の正当な親とするか、という議論である。しかし驚くべきことに、代理出産を経験した関係者たち自身が、これらの関係をどう理解し言葉にしているかについては、ほとんど触れられていない。こうした関係者の感受が比較的扱われにくい

原因として、代理出産の影響についての民族学的資料が非常に少ないことが背景にある (Ragone 1994; Teman 2003, 2006)。代理出産をテーマにした正当な民族学的研究としては、Helena Ragone (1994) がアメリカのエージェンシー6 機関の代理出産プログラムを調査したもの、また最近では Elly Teman がイスラエルでの国家管理の下での代理出産について調べたものくらいである (Teman 2006)。また他には、代理出産の側面を人類学的な観点から解説する研究がある (Roberts 1998; Goslinga-Roy 2000; Cussins 1998; Thompson 2002)。これらの研究は、代理出産プロセスがどう構築されていくのかを知る重要な民族学的データを提供すると同時に、親子関係イデオロギーを含めた文化の諸相を代理出産から読み解くことができるという事例にもなっている (Teman 2006)。本論文では、インドならではの事例を挙げ、代理出産に関する民族学的研究を深めた。

インドの代理出産

概して商業的代理出産には、血縁主義的な親子関係への新たな挑戦を考証するための材料が多いのだが、インドの代理出産は、その独特な構造のためひととき豊富な事例研究の宝庫となっている。オーストラリア、中国、チェコ共和国、デンマーク、フランス、ドイツ、イタリア、メキシコ、スペイン、スイス、台湾、トルコ、アメリカ国内のいくつかの州など、多くの国で代理出産は完全に禁止されている。条件付きで禁じている国もある。ブラジル、イスラエル、イギリスなどである。法律のない国もある。インド、ベルギー、フィンランド、ギリシャなどがそうである。近年の盛況なインドの代理出産を別にすれば、主にカリフォルニア州、イギリス、イスラエルで代理出産は実施されている。インド式代理出産の構造は、カリフォルニアの自由主義に基づく市場モデルに最も近い。代理出産は民間の商業的エージェンシー主導の下にあり、代理母探しや代理母紹介、契約上の規則の決定などもそうした機関が独自の基準に従って行い、国は介入しない (Teman 2006)。

今のところインドで代理出産を規制する法律はない。保健家族福祉省は最近、国内の代理出産を規制・監督するための法案を起草した。議会を通過すれば、この新しい **Assisted Reproductive Technology (Regulation) Bill & Rules, 2008** は、世界で最も代理出産に親和的な法律の一つになるだろう。他の国と違い、この法律は、代理母-依頼者間の契約の履行義務がかなり強力なものになりそうだ (Ksishnan 2008)。ただし法律ができるまでは、アナンドの有名クリニックなどは、独自のルールに従うことになる。

現地調査：グジャラート州アナンド

アナンドはグジャラート州西部に位置する人口約 100,000 人の町である。ニューデリー、ムンバイ、バンガロールなど都市部の不妊クリニックからも代理出産の報告が時々聞かれるが、ほとんどのクリニックはただ技術を提供するだけで、代理母探しなどは患者が自分でやらなくてはならない。医師や看護師、仲介女性が、近隣の村の女性を対象に活発な募集活動を行なうのは、ここアナンドだけである。クリニックには常に代理母が用意されている。わずか 2 年で 2 度目の代理出産をしに来る代理母もいる。代理母のリクルートを統括する Khanderia 医師は、誇らしげにこう話す。

代理出産クリニックならグジャラート州にも、インド全土にも、いや世界中にあります。どこも単発的にやっているだけです。世界中探しても、私たちのように、一つのクリニックで 55 人の代理母が同時に妊娠しているようなところはないでしょう。

Khanderia 医師が最初に代理出産に成功したのは 2004 年、イギリス在住の娘のために女性が孫を生んだケースである。このケースの代理母は、医師の紹介によるものではない。2 例目で、Khanderia 医師はクリニックの従業員に代理母をさせた。それ以来、彼女は 128 人もの代理母を、インド人カップルだけでなく、アメリカ、台湾、韓国、南ア共和国、イギリス、トルコ、スペインなどの外国人カップルにも提供してきた。

外国人カップルがアナンドで代理母を雇えば、かなりの節約になる。カナダやアメリカでは 50,000 ドルから 80,000 ドルにもなりうる代理出産が、アナンドでなら 5,000 ドルから 12,000 ドルで済む。もう一つの大きな魅力は、クリニックが経営する宿泊施設で、代理母が常時監視の下で——食事や薬、日々の活動を医師や従業員が管理する——妊娠期を過ごす点である。代理母は、ベッドが並べられただけの部屋で共同生活を送る。夫や家族は面会を許されているが、泊まることはできない。女性たちは、特にすることもなく、散歩したり、悩みや体験を分かち合ったり、うわさ話をしたりして、次の注射までを過ごす。

データと分析方法

本論文に記載した調査は、2006 -2008 年にアナンドで実施した現地調査であり、私が進めているインドの商業的代理出産に関する研究プロジェクトの一部にあたる。この調査は、代理母 42 人とその夫および義理の両親、依頼親 16 人、医師 2 人と仲介人 2 人に対する、深層的、自由回答型インタビューを含む。女性たちは「あなたの人生について、また代理出産することになった経緯について話してください。」という私の依頼に応じる形で回答したため、インタビュー回答はほとんどが物語形式となった。加えて、代理出産クリニックと代理母ハウスにて 9 ヶ月間の参与観察を行なった。インタビューはヒンディー語とグジャラート語で、ほとんどの代理母が暮らす代理母ハウス、あるいは彼女たちの自宅のどちらかで実施した。代理母が本名の使用を希望しない限り、仮名をあてている。

インタビューした代理母は、全員既婚者で子持ちだった。年齢は 20 歳から 45 歳。1 人を除き、皆近くの村の住人であった。14 人は主婦、2 人は在宅の仕事、残りは学校、病院、農場、店舗などで働いていた。教育レベルは、読み書きのできないレベルから高校卒業まで幅があり、平均は中学校初期あたりまでで、法律の学位を持つ者が一人だけいた。世帯収入は平均約 2,500 ルピー (60 ドル) /月。インドの公式貧困ラインと比べると、インタビューした代理母のうち 34 人の世帯収入が貧困ライン程度、あるいはそれを下回った。特に代理母の夫の多くは非正規の契約労働者か無職という状況にあり、代理出産で得られる報酬 (3,000-5,000 ドル) が年収の 10 倍に匹敵するという家庭が多かった。インタビューした代理母のうち 11 人は、世界中からやってくる「外国人」カップルのための代理母であった。18 人は海外在住のインド人——アメリカやイギリス、スリランカ、南アフリカに定住した NRI——のための代理母、残りはインド各地の上流・中流クラスの専門職階級に雇われた代理母だった。

代理出産と親族の日常的形態

「卵子は彼女のもの、でも子供に流れる血は私のももの」：血縁の再定義

最近の親族組織研究で展開されるキーワードの一つが「物質の共有」である (Daniel 1984; Strathern 1988; Lambert 1996)。「人々の言説の中では、社会的な親族と生物学的な親族との境界は、想定されているよりも不分明である」と人類学者たちは主張してきた (Carsten 2000, p.21)。この主張の根拠として、学者たちは、近縁性に関する地元の言説や風習において、共有物質が重視されていることを強調する。例えば子供は、生前なら母親の血液、

生後は母乳の摂取を通して母親と物質を共有する。これらの体内物質は「変換食物 (transformed food)」と呼ばれる。物質や栄養の共有は、直接的・感情的つながりを自然に生むと考えられている。父親との遺伝上の固定したつながりを重視する支配的な言説に対し、体内物質の共有という概念は、親子関係にさらなる融通性を持たせる。

生物学的な生殖における母親と父親の相対的寄与率も、物質と体液——精子、血液、母乳——の共有という観点から表すことができる。例えば、学者たちはこれまで、インドの文献や口頭伝承において父親による生殖への寄与がいかに重要視されているかということを検証してきた (Böck and Rao 2000; Hershman 1981)。この父系重視は、種を父親の寄与の象徴とし、畑を母親の役割とみなすありふれた概念の中に見て取ることができる (Dube 1986)。精子が詰まった種は、子供の源だとされる。女は大地のように男の種をただ受け入れ、子供（できれば男子）という果実を男に返すことが求められる (Fruzzetti and Ostor 1984; Madan 1981; Meillassoux 1981; Dube 2001)。それと同時に、インド固有の生理学・医学の体系であるアーユルベーダでも、また通俗的な理解においても、精子は父親の種であり、血液から作られると理解されているので、子供は父親の血を受け継ぐのであり、よって父親の系列に属すると考えられる (Kumar 2006)。従って、母親の血は胎児に栄養を与える際に重要であっても、子供のアイデンティティには影響しない (Fruzzetti and Ostor 1984)。Fruzzetti と Ostor が簡潔にこう表現している。「子供の血は男由来であり、不変のものである。男の血は受け継がれていき、女の血はどこかで断ち切られる」(1984, p.103)。

しかし、アナンドの代理母は、血のつながりに対して全く異なった解釈をしていた。母親の血液は胎児に栄養を与えるだけでなく、その血液/物質的つながりが子供のアイデンティティにも引き継がれると考えていた。代理母たちは、ただ男性の種の受け皿に甘んじてはいなかった。

代理母の Parvati は 36 歳で、このクリニックでは年長グループの 1 人である。私が会った時、彼女は胎児の減数手術を受けた直後であった。彼女は、減数手術に反対であると語った。

このままだと子供が育つには狭すぎるので、手術を受けなくてはならないとマダム（医師）に言われた。でも Nandinididi（依頼母）と私は、3 人とも残しておきたかった。私たちは内々にそう決めていた。私が 1 人引き取って、didi が 2 人引き取るとマダムに話した。結局、遺伝子が違っても私の血が流れているのだから。それに私の歳では、この先まだ子供を生めるかどうか分からないでしょう？

つまり Parvati は、子供を引き取る理由として、自分自身の血縁に対する解釈を利用したのだ。代理母 Raveena も、同様の主張をしている。だが彼女は血という物質的なつながりに加え、妊娠・出産という労働——「汗」のつながり——もまた、子供を自分の子とするもう一つの根拠として強調する。Raveena はカリフォルニア在住の韓国人カップルの子供を妊娠している。お金は息子の心臓手術にあてるつもりである。彼女に会ったのは、2 回目のエコー検査のすぐ後だった。

Anne (依頼母) は女の子を欲しがっていたけれど、エコー検査の前から、私から生まれるのは男の子よって言ってあったの。私の子が二人とも男の子だから、この子もそうだと思う。私は正しかったのよ、男の子だったの！彼女は卵子をあげただけで、血と汗と労力を払うのは私だもの。もちろんこの子は私を母親だと思うでしょうね。

汗 (労働) と血 (物質) による代理母と胎児の絆が、遺伝的なつながりよりも強力に支持されることもしばしば見られる。

Sharda は、代理出産で生んだ子供に母乳を与えた数少ない代理母の一人である。授乳したことで子供とのつながりが強化されたと彼女は感じている。

あの人 (依頼母) に子供を渡したことについて自分がどう感じているか、よく分からないわ。彼女が (自分の子宮で) 子供を育てられないことや、お乳をあげられないことについて、彼女が悪いわけではないことは分かっている。腎臓の病気だそうよ。でも、子供に感情的なつながりや愛情を感じていないように見える。赤ん坊が泣き始めても、お構いなしにあなたとしゃべり続けていたでしょ？おむつを交換するのも忘れるの。本当の母親だったら、そんなことすると思う？あの子が泣くと、私も泣きたくなる。愛情を感じないようにするなんて無理よ。お腹の中であの子が成長し、動くのを感じてきた。腹痛、腰痛、5 ヶ月以上のつわり！最初の月に 200 本近い注射も打った。ここまで大変だった。

Sharda の話では、子供との物質的なつながり (血液、母乳) や妊娠出産に伴う労力によって、代理母は遺伝上の母親よりも強い愛着を子供に感じることになる。こうした血縁の再解釈と、代理母が胎児との間に築く日常形成型の親子関係を、無学な女性の単なる西洋医学への無知として片付けることはできない。代理母は、子供と遺伝的なつながりが

ことを認識している。しかし、それでもなお、血液と（場合によっては）母乳という共有物質を根拠に、（より強力な）絆が子供との間にあると主張する。

さらに Raveena と Sharda は、自分の子供だと主張する根拠を、共有物質だけでなく妊娠出産に伴う労働・労力に置く。こうした労働と共有物質によるつながりは、単なる遺伝的なつながりより、また父親の精子や血のつながりより強いものであると信じられている。

「ペニスの出番はなかったわ。注射しただけよ！」：代理出産における父系主義の再解釈

フェミニストたちは、生殖補助医療のもつジェンダー性を以前から認識しており、父権的動機——男系の遺伝的つながりを形成する——のために女性の体が利用・悪用されていると指摘してきた。中には生殖補助医療が男性の遺伝的欲望を優先させ、女性の生殖力を否定していると論ずる者もいる（Rothman 1989; Roberts 1997）。特に代理出産契約は「父子関係を高めるために母子関係を低く評価している」（Roberts 1997, p.249）といわれた。しかしアナンドの代理母は、代理出産における遺伝的なつながりの重要性と男性の役割について、違った見方をしている。

代理出産契約は、代理母に対し、夫との性行為を禁じている。代理母ハウスで過ごす場合はさらに監視が強く、夫との接触は最小限にとどめられる。この2年で2回目の代理出産をする Rita は、代理出産中の夫の「去勢」についてこう冗談を言った。

一回目の代理出産では、9か月間、力仕事や危険な作業を一切禁じられていた。夫とセックスすることも駄目と言われていた。[笑いながら]そんなことを承諾するのは、他の場合だったらありえないんだけど、どうしてもお金が必要だったから、彼は折れたのよ！こういうこと（代理出産）がすごく少ないのは当然でしょうね。だって、こういう状況を喜ぶ男性がいるかしら？[クスクス笑って]私は妊娠しているけれど、彼の子じゃない。それだけでも嫌なのに、私がこうして代理母ハウスにいることで、彼は子供の世話や、時には食事の用意までしなくちゃならない。

Patelbhai（依頼父）にとってもつらいことだ。彼は私に触れてさえいないし、実際私と話したことさえない。少なくとも Smitadidi（依頼母）は私がどんなふうに過ごしているか知っている。赤ん坊がお腹の中でどんな風か教えたりもする。この前は蹴っているところを触った。でも Patelbhai と私はお互い他人同士だ。なのに私は彼の子を妊娠している。

Rita の語りは、男性たちが代理出産では最小限の関与しか許されないので、結果的に彼らを去勢していることになる、ということのようだ。Parvati は、代理出産において男性の出番がないことを繰り返し強調し、彼女の夫と胎児の関係について興味深い解釈を聞かせてくれた。

夫は今自分の両親のところにいる。ここへも時々訪ねてくるけれど、普段は電話で話すだけだ。この先数ヶ月は何も（セックスを）してはならないと言われているので、それで問題はない。彼がここにいる必要はない。ほら、彼の子供なら、常に関係していなくてはならないでしょう。毎晩の「作業（process）」[挿入を表す手振りをして]で子供は育っていく。小さい種がこんな風に[ポンプで風船が膨らむ様子を手で作りながら]大きくなって、9ヶ月したら出てこられるようになる。でも代理出産では、夫とも、もう一人の男性（依頼父）とも関係しない。子供は注射で大きくなる。

従って Parvati は、医学やテクノロジー——代理出産の場合は注射——が、夫やペニスの役割を果たしたと言っているのだ。Parvati の語りは、無学な女性による科学や生物学に対する無知として読み取ることもできるが、彼女の語りの意味するところは無視できない。代理出産における夫の役割に重きをおかないことで、Parvati は暗に自分の貢献を強調しているのだ。この会話の後に、彼女はこう付け足す。

出産直後のことを考えて、（依頼親から）毎月もらうお金を少しずつ貯金している。このことは夫には言っていない。今はほら、依頼者が払ってくれるので、毎日アイスクリームやココナツ水、牛乳なんかを食べている。でも子供を産んだあと、良い食事を摂らなければ、病気になったり弱ったりするのは私の体だ。これだけのことをしているのだから、そうしてもいいはずだと思う。

Regina という代理母も同様のことを言い、代理出産で稼いだ金を自分が管理するのを正当化している。Regina は 45 歳、ドバイに住むグジャラート人の子供を妊娠している。

とんでもない、お金のことは夫には話していないし、何に使うかも言っていない。言うはずないでしょう？稼ぐのは私なんだから。教えたら彼が使ってしまう。女性は代理出産で相当辛い思いをするのに、何で夫にお金をあげなきゃいけないの？とにかく、今回

彼が何をしたっていうの？何もしていない。少なくとももう一人の男性は精子を差し出したけれど、そのことだってそんなに大した仕事ではない。

バーバラ・ロスマンは『Recreating Motherhood: Ideology and Technology in a Patriarchal Society (母性をつくりなおす)』(1989)の中で、家父長制主義に基づくイデオロギー——父系重視——を生殖技術が強化すると論じている。「女性の中には男性と同じように種による遺伝学的関係、つまり<血>のつながりが子供との絆だと信じているものがある。この血のつながりとは、臍の緒や分娩の出血をさすのではなく、形而上学的な遺伝学的関係を意味している。」(1989, p.45 : 『母性をつくりなおす』広瀬洋子訳, 勁草書房, 1996, p.29)

アナンドの代理母は、ロスマンの本に出てくる女性と真逆のことをやっているように思える。つまり、妊娠出産に伴う本物の血と労働に伴う汗を強調するのだ。代理出産に関わった男たちの中には、種を提供した者もいるかもしれないが、妊娠出産の実際の過程における貢献度が非常に小さいという理由で、子供とのつながりは一蹴されてしまう。この親子観は、父系制に対する挑戦であると同時に、代理出産の過程における女性の役割の重要性を認め、その結果代理出産で得た金に対する権利を肯定する考え方である。

しかしこうした父系制に挑戦する日常形成型の親子関係が語られる一方で、父系制と父方居住に基づくインド的親族観を強調する語りも同時に見られる。赤ん坊と代理母が共有する流動物質に焦点を置く「血」のつながりの重視は、創造的かつ動的な固有の親族観であるが、家父長制に基づく親族観や「所有」についての認識が完全に否定されているわけではない。インドの親族組織の多くは父系性と父方居住性という2つの概念に基づいている。つまり家系は男系で引き継がれ、女性は父あるいは夫の「所有物」と考えられており、結婚前は父と、結婚後は夫の親族と同居する。代理母はこうした概念を当然のものとして受け入れている。

代理母 Jyoti は、子供を引き渡すことを辛く感じてはいるが、その覚悟についてこう語った。

もちろんこの子を渡すのは辛い。だけど、娘だって結婚したら相手に渡してしまうわけでしょう？娘は *paraya dhan* (他人の所有物) だし、この子だってそうだ。娘が私たちと住むのは今だけで、結婚相手とその両親と暮らす場所が本当の家だ。私たちには娘を育てる責任はあるが、何の権利もない。18歳まで私の責任で育てたら、渡さなくてはな

らない。けれど、娘が何か悪いことをしたら、それは私の責任だと思う。少なくともこの子に関しては、一旦引き渡してしまえば私の責任はなくなる。あとはこの子の父親が考えることだ。

35歳の代理母 Hetal も同じことを言う。

子供を渡すのはそれほど辛くない。結局のところ、この子は父親のものよ。父親は、この子にそれはたくさんのお金をつぎ込んでいる。私たちが結婚式で娘をあげてしまうでしょう？私たちは娘が生まれたその日から、引き渡す覚悟をしている。娘が自分たちのものだと思ったことはないけれど、それでも一緒にいる間は世話をする。それと全く同じことね。この子が自分のものでないことは分かっている。あの人たちは、私の食事や薬なんかにすごくたくさんのお金をつぎ込んでいる。だからこの子はあの人たちのものよ。でも、私は自分の子と同様にこの子を愛するでしょうね。それが私のできる精一杯のことだから。

日常形成型の親子関係に関する代理母の経験や解釈は、父系性や父方居住性に真っ向から挑戦するものではないにしても、親子関係の多義性を示していることは確かである。一方、Raveena や Parvati、Sharda の語りに見られる血縁の再解釈は、「遺伝子」最優先の親子観に異議を唱えるものである。さらに、こうした再解釈によって、これまでインドの受胎信仰に関する先行研究の多くが主張してきた内容——子供は父親の「種」の産物であり、父親の血を受け継ぐという考え方——が逆転する。代理母の主張は真逆である。子供は（出産する）母親の血と汗の産物であり、出産の労働・労力の結実で、子供はそれを受け継ぐのである。また一方で Jyoti や Hetal のように、遺伝上の両親による「投資」を根拠に、子供は父親の「所有物」であるという父権主義的な主張をする代理母もいる。結局、代理母は、娘を嫁に出すことに代理出産をなぞらえることで、父方同居性を肯定しつつ、同時に自分が母としての資格を持つことも主張しているのである。

「私と彼女は didi (妹)、barhi didi (姉) と呼び合う」：境界を超えた労働の結びつき

北インドの親族組織に関する論文では、親族組織とは、父系性（男系で構築された一族）と父方同居性（夫の親族との同居）のみならず、カースト内結婚を基盤として厳密に構築されたグループの単位を表すことが多い (Trautmann 1981 ; Dyson and Moore 1983;

Lambert 1996)。北インドの親族組織は、不変的なつながりとカースト制に基づく排除で成り立っているとされる (Sax 1991; Raheja and Gold 1994)。こうした固定的な見方では、グループの境界を超えて起こる日常生活や日常的交流は排除され、限定された社会関係しか明らかにすることができない。

Barbara Bodenhorn の親族組織研究によると、イヌピウト (アラスカ州北部ノーススロープに住む捕鯨民族) の社会では、食物、労働、儀式への参加、単なる交友など多種多様な相互関係に基づき、親族組織は常に目的に応じて更新される。(Bodenhorn 2000)。「親族かもしれない人々で構成された無限の宇宙から親族領域を切り取る」のは、生物学的なつながりよりむしろ、関わり合いのための努力によるつながりである (2000, p.143)。「共有物質」によって築かれる親族組織は、血縁関係を過程という側面から再概念化する余地を生む。「親族という営み (kin work)」によって立ち現れる親族関係もまた、日常形成型の親族関係の一形態だといえる。

代理母は妊娠という「労働」、出産の大変さを強調することで、親子関係を構築し、代理出産児を自分の子供だとみなす。「労働」によって構築される親族の日常的形態、その第二例目は、代理母と依頼母が関係を維持するために行なう親族的労働である。

代理母 Parvati は、懐かしげな口調で依頼カップル、特に依頼母との関係を語ったが、自分の期待と現実を混同しているような感じであった。出産もまだであるのに、子供の人生における自分の重要な役割について、すでに起こったことであるかのように話すのだった。

依頼夫婦とはすごくいい関係なの。出産のあと、Nandinididi (依頼母) に連れてこられたこの子にお乳を飲ませたわ。誕生日には招待状が送られてくる。結婚式にも呼ばれた。この子に熱が出た時には電話をかけてきて「心配しないで神様に祈ってちょうだい。子供に会いたいのなら連れて行くわよ。」って言ってくれるの。こんなに気遣ってくれる妹ができて、私は本当に運が良かった。ここの他の代理母がどんな風に扱われているかを知っているから。

Parvati のケースでは、依頼母による親族的労働 (授乳の依頼や手紙、招待など) が、単なる「想像」からファンタジーになってしまっている。しかし、こうしたつながりが実際に、国境を越えてまで続くこともある。先に紹介した代理母 Raveena は、カリフォルニアの依頼母 Anne が出産後も関係を維持しようと努力していることを強調する。Raveena の教育的、経済的水準が比較的高めだったこともあって、彼女もまた、互惠関係を積極的に認める人間の 1 人だった。

Anne は妊娠 8 ヶ月の時にやってきて 2 ヶ月間私と過ごした。家族みたいに一緒に住んだのよ。夫が彼女のパスポートの訂正申請も手伝った。あの人たちが帰国してからも連絡をとり続けている。ほら、今回 Anne がくれたイヤリングよ。[ダイヤモンドとホワイトゴールドのイヤリングを見せる。] 私たちは本当に仲良しになったから、招かれたらアメリカに会いに行くと思う。あの人たちはきっと、末息子の健康面や教育面などすべて気にかけてくれるはずだ。あの人たちのおかげで、私たちの人生は変わるでしょう。

代理母は、依頼親と自分との間に非常に大きな階級的格差が存在することを知りつつも、時には国や階級差を超えた関係を、語りやファンタジーの中で築いていた。こうしたことは Parvati のファンタジーにも反映されている。彼女は夫婦にとって特別な人間であり続け、子供の誕生日や結婚式など重要な儀式には全て、家族同様に参加するというファンタジーである。Raveena は、夫婦との友情を続けることが自分の息子の将来のためになると信じている。これが現実か空想かはさておき、代理母は階級、時には国境さえ超えた親族意識を相手の女性に持つことができるのである。

Raveena と Anne の関係は異人種間のつながりという珍しい事例かもしれないが、カーストや宗教を超えたこうしたつながりの事例は数え切れないほど見られた。イスラム教徒の代理母 Salma に、ヒンドゥー教徒の在南アフリカ・グジャラート人 Preeti という依頼母との関係を尋ねたところ、最終的に彼女は私に、インドの政治と宗教に関する講義をするはめになった。

普通の人々が、ヒンドゥー教とイスラム教で対立することはない。あれは政治家が作り出したものだ。彼らは kursi (権力) のことしか考えていない。政治家は私腹を肥やしてグジャラート人の名を汚している。私と Preetiben の関係を見てごらんさい。彼女はムスリムではないが、妊娠している私の代わりに roza [ラマダーン月にイスラム教徒が行なう断食]をしたいと言ってくれた。私たちの間柄は、信仰とは関係ない。もっと強い絆を感じる。生みの母が違っても、姉妹になる場合があるわね？私たちはまさに姉妹のよう——1人がムスリムで、片方がクリスチャンというだけ。多分彼女はクリスチャンだと思う。尋ねたことはないけれど。インドの人間でないことは知っている。

Salma は同じカーストや宗教間での結婚によって区分される親族領域より、依頼母との間に築いた日常形成型の親族関係に尊さを見出している。しかし、Salma を雇っている依頼母 Preeti の方に、宗教とカーストの重要性について尋ねてみると、彼女はこう白状した。

本当はヒンドゥー教徒で、教養のある、できればバラモン（カースト制度の上位階級）の代理母を探していた。妊娠中の母親の行動が子供に影響することは、科学的に証明されたんじゃないなかったかしら。だから、もし代理母が妊娠中に pooja[ヒンドゥー教の礼拝]を行なえば、子供にも聞こえるし神の祝福も受けられるでしょう。でもあの時は Salma 以外に代理母はいなかった。Salma がムスリムだとしても、こうした関係が築けてよかった。今はもう姉妹のよう。いえ、姉妹以上ね。姉妹だって私のためにこんなことをしてくれないでしょうから。

Khanderia 医師は、妥協からスタートすることの多いこうした異カースト間、異宗教間のつながりをこう説明する。

言っておくけど、カップルに選り好みする余裕はないのよ。現時点で代理母の需要は供給をはるかに上回っているし、この先も状況は変わらないでしょう。順番待ちリストには 300 組以上のカップルがいる。見た目やカースト、宗教を理由にして、私たちが紹介した代理母を気に入らないと言ったカップルはほんの 1-2 組だけだった。私たちの哲学は「得られるものを得よ」。手に入るものを嫌がるなんて[肩をすくめて]自分のためにならないわね。女性 2 人が一旦関わり合いを持ち始めると、たいてい、非常に強い絆ができる。外国人顧客の中には、出産後も長く代理母と連絡を取り続ける人たちもいる。

医師は明らかに人間関係に関心を持っておらず、代理出産による関係を医学的に捉えるだけだが、代理母は、依頼母との絆の尊厳を信じ続ける。代理母の Raveena は次のように考えている。

私たちの間には生まれる前からの絆があって、その絆を保つためなら何でもするでしょう。

「私達はみな泥池に住む魚。一緒に泳げばいい。」：代理出産と9ヶ月間の姉妹関係

最初の動機が何であれ、多くの代理母は、コーストや文化の違いを超えて最終的に依頼母との関係を築き上げる。親族の日常的形態第三例目は、アナンドの代理母間で見られた関係である。代理母同士の親族的つながりは、仲間意識と同居が基になっている。

アナンドの典型的な代理母にとって、妊娠9ヶ月間の過ごし方は2種類ある。Khanderia 医師のケアの下でクリニックの上階に住むか、クリニックが提供する寮に住むかである。クリニックでは一部屋8人グループになる。部屋にはパイプベッドがずらっと並べてあり、どうにか歩ける程度の隙間しかない。寮の方はそこまで殺風景ではなく、もう少し動き回ることができ、自由に使えるキッチン（料理が許されている）、テレビ、礼拝堂がある。家族は会いに来ては良いが宿泊はできない。代理出産を終えた後の生活を考えた職業訓練もあり、Raveena（元代理母で寮母）は英語とパソコンの講師を代理母のために手配している。ここは代理母たちのための新しい「家」であり、当然のことながら、彼女たちには親しい友情関係が生まれる。

代理母の Sabina は、出産後も Raveenadidi の寮に戻りたくて仕方がない。

家に帰ったらすぐ仕事をしないとイケない。それならむしろ2ヶ月間寮で休んで、ここの姉妹たちと一緒に過ごしたいわ。特に Mansi と Diksha（寮にいる別の代理母）の二人とすごく親しくなったの。Mansi はとても繊細で、Diksha は姉御肌タイプね！だから私達3人は完璧な取り合わせよね。Rubiadidi の寮は、寮っていう感じじゃない。皆の家という方が近い。彼女が godh bharai（ベビー・シャワーに似たヒンドゥー教の儀式）を開いてくれるのを知っているでしょう。甘い物をたくさん食べて、写真まで撮ってもらうの。私達ムスリムにはそういう儀式はないけれど、ここでは全員が家族のように、そういう催しを何でも楽しむことができる。この10月にはナヴラトリ（昼間の断食と夜の祝宴、グジャラート伝統の踊り dandia が捧げられるヒンドゥー教の祭り）のお祝いまでしたの。その夜 Raveenadidi は、外出して dandia を踊るのを許してくれた。

代理母の Mansi はこう付け足す。

喧嘩はしない・・・そうね、テレビのチャンネル以外のことではね！寮にいるような感じは全然しない。家といった方がいいわね。ここにいる限り、好きなものを好きな時に食べて、動いて、テレビを見て、好きな時に寝ることができる。この部屋の代理母は7人——同時に妊娠した7人姉妹ね！私たちの村はそんなに離れていないから、ここを出た後でも、きっとまた会えるわ。Raveenadidiには、美容業の訓練を受けたいってお願いしたの。英語やパソコンで仕事が見つかるとは思えないけれど、美容院でなら働けるかもしれない。これが終わったら、Dikshaと一緒に美容院を始めるかも。

MansiやSabinaにとって、寮は単に妊娠を監視される場所ではなく、コミュニティでもあるのだ。いくつかの事例では、他の代理母との親族的つながりが、将来の仕事での援助や人脈として役立っていた。こうしたつながりや連携は、「強欲な義姉」(devrani)とあだ名される仲介人たちに対抗する強力な手段にもなる。

今回インタビューした代理母のうち9人は仲介人Nirmalaに連れてこられた者たちで、その際、サービス料——村の1軒1軒を訪ね、代理母になれそうな女性を説得し、クリニックへの車の送迎をして検査を受けさせる——として1人最高1万ルピーを支払わされていた。皆Nirmalaのことを「didi」(お姉さん)と呼ぶが、面白いことに、彼女がいない時には「door ki dervani」(遠縁の義姉)と呼ぶ。この「遠縁の義姉」というあだ名が、仲介人とのつながりの薄さ、およびその関係性がビジネス的なものであることを物語っている。クリニックの代理母たちの間で形成される親族的つながりは、強欲な義姉の暴君に対抗する手段として用いられた。

Varshaはクリニックにいる38歳の代理母で、ウッタル・プラデーシュ州のカップルの子供を妊娠している。昼食の席でNirmalaの話が始めたところ、代理母全員が話に加わってきた。

Nirmalaが私をここに連れてきたの。あら、彼女に会ったことないの？ここにいる人たちは皆彼女に連れてこられたのよ。彼女は私のdervani(義姉)よ。一軒ずつ訪ねて、ドアをノックして誰でもいいから最初に出てきた人間を捕まえて「代理母にならない？」ってきくのよ。[全員笑う]。ああ、でも彼女のことをあなたに話すべきではないわね。トラブルは嫌だから。同じ池に住んで、ワニを敵にまわすのは困るわ。

代理母 Regina が割って入った。

あら、いいじゃない。私たちは皆同じ沼の住人よ。ワニだって言いなりにできるわ。私が全部話すわね。この Nirmaladidi は、クリニックへの送迎代に 1 万ルピー (200 ドル) を要求してきた。痛い思いをするのは私たちで、大金を稼ぐのは彼女というわけ。分かるでしょう、私たちはもうどうしようもない状況でここに来ているのに、彼女はこれでビジネスをしているの。こんなこと、許されるはずがない。私たち代理母は悲惨な状況にいるけれど、誠意を持ってこれをやっている。私たちはこのことを寮母の Raveenadidi に訴えた。私たちが受けたような損害を他の代理母が受けないように、契約書の中に書いて欲しかった。こういう追加料金は、私たちを雇っているカップルが Nirmaladidi のような人たちに払うべきだわ。この 1 万ルピーは、私たちや子供たちにとって大金なの。どうして何の関係もない人にそんな大金を払わなくてはならないの？本当の家族だったら、こんなことはしないでしょ。Par devrani to devrani hi hoti hain, kanjoos [でももちろん、義姉は強欲に決まっている——彼女のように]。

このように代理母たちは、代理母どうしの姉妹的なつながりで、強欲な仲介人とのビジネス的な「義理の」つながりに対抗しようとしているように見える。仲介人と代理母のつながりは、純粹に商業的で互惠関係に基づかないので、ヒエラルキーの中で低く (もしくは「遠く」) 位置づけられる。しかし、姉妹的なつながりは、カースト内・宗教内結婚によって分割された親族領域を超えるだけでなく、数々の相互関係——労働、儀式参加、時間の共有——を通じて更新され、存続していく。こうしたつながりは、集団的アイデンティティ——最低限の権利保証と搾取からの保護を要求するカー——を代理母に与える。

「同じ沼で泳ぐ」ことによって、代理母はこの集団的アイデンティティを獲得する。私の現地調査中に、Raveena (寮母) は代理母のメッセージを医師に渡し、契約には次の特別項目が追加された。「依頼カップルは、代理出産の過程で発生した仲介料を全額支払う義務を負う。」

考察

代理出産と親族の日常的形態：共有物質、時間的共有、親族的労働

これまでの学者たちによる議論は、商業的代理出産が、西洋の伝統的家族観、親子観、自然観を混乱に陥れた問題についてであった。生殖イコール愛と結婚と性行為に基づく「自然な営み」と捉える伝統的な道徳的枠組みは代理出産によって崩壊し (Schneider 1968)、身体、感情、価値観の商品化にその座を明け渡した (Strathern 1992)。金と引き換えに子供を引き渡すような出産は、これまで主流であった認識、つまり妊娠すれば当然その女性はこれから母になると社会的に公約したのと同じであるという思想に反し (Farquhar 1996)、一連のまとまりとして理解されていた母性役割を、遺伝上の母、出産する母、依頼母、代理母、その他にバラバラに壊してしまった (Sandelowski 1990)。体外受精型代理出産の出現は、技術を用いてカップルの身体から遺伝に関わる部分だけを取り出し代理母の子宮に移植するという、さらに破壊的な境界交差を引き起こした (Teman 2006)。

伝統的家族観や親族観への新たな挑戦を探る上で、商業的代理出産が格好の題材を提供することは間違いない。本論文では、インドならではの代理出産の事例を見ながら、親族の日常的形態と名付けた関係に焦点を当て、実際の行為者によるこうした親族観や母性観への挑戦の実情を分析する。インドの商業的代理母は、普通の代理出産に伴うトラブルに対処するだけでなく、インドの代理出産に特有の状況にも対処を迫られる。妊娠中に家族との面会を制限されながら他の代理母と暮らし、社会階級、カースト、宗教、あるいは人種や国さえ異なる人々のために子供を生むのは、インドの代理出産に特有の事象である。本論文では、代理母が新たな根拠に基づいた親族組織を形成することによって、従来親族観に挑戦していることを示した。代理母が築く親族の日常的形態において、親族的関係を決定する一番の要因とされるのは、生殖による血縁関係ではなく、物質の共有、時間の共有、そして労働（妊娠出産、および親族的な関係を維持するために必要な継続的努力）である。

労働や物質に基づく親族の日常的形態は、従来親族組織の概念にどのような影響を持つのだろう。代理母は実際に、日常的な親族意識や物質の共有意識を経験している。このことは、2つの大きな理由で、従来親族組織研究への挑戦だといえる。第一に、代理母の語りは、親子関係を構築する代替方法を提案している。生物学のみを基盤とするつながり以外に、物質に基づくつながりがあることを示唆しているのだ。

インド・ラージャスターン州の異カースト間の関係形成において、地域とジェンダーが重要であることを分析した Helen Lambert (1996) は、出産や結婚で生じる関係以外に、物質の概念を用いて関係を形成する方法を提案した。地域公認の親族形態が、出産/家系に基づくものに限らず、住む場所や養子縁組、里親による関係にまで及ぶことを実例によって明らかにしたのだ。妊娠中の母親の血液は、胎児の栄養になると考えられている。(現地の生理学・医学によると) 血液、母乳、精子は、摂取した食べ物が消化過程で精製された結果生じた物質で作られるからだという。アナンドの代理母の主張も、あるレベルではこれと似ている。代理母の血が胎児を養っているという主張である。しかしさらに強調されるのは、こうした血の共有が子供のアイデンティティにまで影響を与えるという点である。生殖イデオロギーや受胎信仰に焦点を当てたインドの民族学的研究によると、父系社会において精子は血液から作られると理解されている。子供は父の種の産物であり、父親の血を受け継ぐので、父親のグループに属する。母親の血液は胎児に栄養を与える重要な役割を担っているが、アイデンティティを与えはしない。代理母は、独自に日常形成型のつながりを築き上げ、定式化した父系制と種による支配に挑戦しているようだ。代理母は男性の貢献度を認めず、その父系制と父方居住性に対する解釈は、従来のインド親族組織理論よりも複雑である。代理母の血は胎児を養うだけではない。アイデンティティを授けるのだ。

また、つながりの強さにも強弱があるという主張も、この血縁の再解釈と同じくらい強調される。代理母が自分の子だと主張するのは、自分の血で胎児を養ったからというだけでなく、そう主張する資格があるからだという。子供は彼女がつぎ込んだ努力、妊娠出産の労働が実った証である。その上、代理母と胎児のつながりは、依頼母と胎児の遺伝だけのつながりよりも強く、男性の精子や遺伝子の支配にも打ち勝つ。男性側の「労働」的寄与が非常に小さいので、代理出産の過程には関係していないとみなされるのだ。

Micaela di Leonardo (1987) の先駆的研究では、「営みとしての親族 (kin work)」という概念を「異世帯間の親族的なつながりの形成、維持、および親族間での儀礼的祝賀」として説明する (1987, p.442)。我々が文化的に愛と捉えるものの中に具現化された実労働を明らかにし、その労働の政治利用について検証することで、親族的なつながりは変性され、そのつながりの形成と維持につきものの、ジェンダー化された労働形態が浮かび上がる。代理母が築く親族の日常的形態もまた、親子関係を主張する根拠として労働を強調することにより、従来の親族的なつながりを変性させる。こうした労働には、妊娠出産の労働だけでなく、代理母や依頼母による親族的な営み (kin work)

(プレゼントを送ったり、手紙を書いたり、子供が生まれたあとも連絡をとったりすること)も含まれる。

第二に、代理母は、依頼母や他の代理母と、階級、宗教、時には人種、国籍を超えた親族的つながりを形成する。こうしたつながりは、父系制やカースト・宗教によって細かく分けられたインドの親族組織構造に反する。日常生活での交流や時間の共有、継続的労働、関係維持の努力は、従来の限定的な相互関係モデルに勝るものであり、アナンドの「姉妹」的絆は、あらゆる境界を乗り越えているように思える。

こうした親族の日常的形態に対し、批判の目を向けずに結論とすることは、特に体外受精型代理出産の文脈において、軽率であろう。代理母は、遺伝的つながりの商品化の究極ともいえるシステムの中で、生物学と遺伝子の神聖性を崩壊させるような親族意識を形成する。体外受精型代理出産への需要が高いのは、他でもなく、遺伝的つながりが強力かつ永続的な愛着基盤であり続けているからだ。血の繋がった子供を持ちたいという願いを叶えるためなら、人々は世界の裏側まで行ってインド人代理母を雇うこともいとわない。体外受精型代理出産の「美点」は、人工授精型代理出産や国際養子縁組と違い、依頼カップルが境界を一切超える必要がない点である。子供が両親の遺伝子を引き継ぐということは、その両親の人種、カースト、宗教も引き継ぐということだからだ。

代理母が築く親族の日常的形態によって、従来の親族関係の基本的（遺伝的）原則が揺らぐことはほとんどない。しかし、代理母が示しているのは、従来の原則に対し、ローカルなレベルで再度折り合いをつけようとする永続的なプロセスである。代理母たちは、親族的つながりの形成と維持において共有物質と継続的労働が重要であることを主張し、その主張が自分たちのために利用できるということを実証してみせた。女性たちによる、このささやかな、一見取るに足らない主張が、親族組織をめぐる従来の考え方に対する再評価を引き起こした。教科書的な親族組織モデルと違い、親族の日常的形態は、柔軟性に富み、変化を受け入れる。関係（relatedness）を構成する要素がいかにかに様々であるか——共有物質、時間の共有、継続的な女性の労働など——を知る新たな可能性を、代理母は提供しているのである。